

久留女木地区 振興策のカギ

「子ども世帯 近隣に居住」

静岡文化芸大調査

静岡文化芸術大（浜松市中区）

の船戸修一教授（地域社会学）が27日夜、浜松市北区引佐町の久留女木地区を訪れ、新たな地域振興策の立案を目的に同地区で実施した全世帯調査の結果を住民に報告した。中山間地域のため高齢化が課題となっているものの、子が近隣に住んでいる世帯が多いことが分かり、離れて暮らす子や孫を巻き込んだ地域づくりを提言した。

船戸教授は「生らと久留女木の棚田の耕作を続けている縁で、学問的な社会調査の手法を地域振興に生かせないかとアンケートを実施。地区の全58世帯に調査票を配布し、50世帯127人から回答を得た。

調査結果では、この50世帯には計42人の「地区外に居住している子ども」がおり、約7割の子が2時間以内の場所に住んでいることが分かった。子の帰省頻度は「年3〜4回」「年11回以上」という回答が同数で最多となり、船戸教授は「まだまだ若い人を巻き込んだ地域づくりの活動はできるだけ」と指摘した。

アンケートの結果を報告する船戸修一教授
浜松市北区引佐町で



（小佐野慧太）